



特集
高齢者の実力を生かす

近鉄大阪線・榊原温泉口駅を降りると、辺りにはのどかな里山の風景が広がっていた。そんな中を北東方向に車で15分ほど走ったところに榊原温泉郷があり、そのほ

高齢者に頼るしかない……

万葉の昔から「七栗の湯」と呼ばれ、かの清少納言の「枕草子」にも「湯は、ななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」とうたわれたほどの名湯・榊原温泉。その中でも大正8年に創業した湯元榊原館は、唯一館内に源泉を保有し、かけ流しで使用している老舗である。従業員数111人。そのうち60歳以上が62人、70歳以上も78歳を筆頭に18人を数える（平成23年1月現在）。実に60歳以上の従業員が約55%を占める計算となるが、皆生き生きと働いている。全般的に体力を要する旅館業務において、高齢者を活用するに至ったきっかけは何か。そして、それにより得たものとは――。



▲お迎えのお菓子やお茶をセットしてきた客室係の杉本さんは常に笑顔を決やさない



▲同社で20年以上も湯守を務めてきた川村さんは、ことし76歳になる



▲「数年後には私も再雇用してもらいたいと考えています」と笑う森澤幸一さん

平成7年、同社は定年を60歳から65歳に引き上げた。賃金は65歳まで下がらず、役職定年も撤廃。さらに会社が必要と認めた場合、70歳まで嘱託またはパート従業員として再雇用することも決めた。その上、70歳を超えても本人が希

定年延長で職場環境を整備

同社が高齢者を積極的に雇用するようになって15年ほどがたつ。きっかけは、若手の定着難だった。20年ほど前から毎年10人前後の新卒者を定期採用していたが、そのほとんどが1年以内に退社し、勤続する者は1割程度しかないかった。「せっかく雇っても『ほかにやりたいことがあるから……』とすぐに辞めてしまう。労働力を補うには高齢者の力に頼るしかありませんでした。年齢は高くて皆元気だし、働く意欲もある。そこでもう少し長く働いてもらったらどうか、ということになったんです」と同社総務部長の森澤幸一さんは説明する。

老舗旅館を支える
高齢従業員の「もてなし力」

中心に湯元榊原館はある。広いロビーに入ると、行き来する従業員の年齢層が高いことに気付く。フロントをはじめ、館内の利用案内、

脱衣・風呂場の案内、洗い場ホール、配膳室、客室係などの各持ち場で、60歳以上の従業員が、主力として働いているのだ。

三重・津市
湯元榊原館

特集

取材・清水 高山清志
関根利子

組織の規則上は定年を過ぎていても経験豊富でかつ元気な人は重要な人材だ。そんな高齢者を積極的に活用し、会社を強くすることができれば、これからの社会に明るい展望をもたらしてくれるのではないだろうか。今号では、そうした取り組みを既に実践している中小企業にスポットを当てた。

高齢者の実力を生かす

